
匣庭エデン

多和島 かの

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

匣庭エデン

【Nコード】

N0048W

【作者名】

多和島 かの

【あらすじ】

武力の強大なこの国の軍人は、総じて最上の扱いを受けるが、一度負傷し戦線離脱を告げられればその地位はあつという間に地に落ちる。いわゆる名誉の負傷が認められない国で上官を庇い右腕を失った軍人の栄士と、敵国の母を持ったが故に軍人の父が作る偽りの生活に、一人つきりで飼い殺される車椅子の瞳子。やがて二人の出会いは互いにとって、大きな意味を持つこととなる。

一、喪失

この国は、樂園だった。

強大な武力により勝ち取ってきた富で溢れた街では、心地よい嘘と快楽が飛散し、気化してはまた歪みに溜まる。そしてその富を他国より奪う軍職の人間は何より崇められ、慕われ、最上の扱いを受けていた。その甘い蜜に引き寄せられ、幼い頃より軍人を目指す人間は多い。しかし実際に職に就ける者はたったの一摘みである。理由は、二つある。

一つ、その者に軍人として秀でた素質がない者は容赦なく振るい落とされるから。

二つ目。我が国には、「名誉の負傷」というものが存在しない。戦いの中で負傷し軍人として機能しなくなった人間は、昨日までの扱いが嘘のように地に叩き落とされる。挙げ句の果てに使い道が無い者の意を込めて軍奴ぐんどと呼ばれ、人としての扱いは愚か地を這う最下層の生活を強いられるのだ。

どちらかというと、一つ目の理由よりこの二つ目の理由を恐れて軍人にならない者が多い。それだけ国は戦いの中で負傷した人間のその後の補償やフォローに興味がない。使えないものは使わないのだから、この国は強い。不要な部分に金を使わないから、軍備を強化できる。俺は、この国の軍のそんな所が気に入っていた。いらないものを爽快な程に切り捨てるこの国は、必要なものしか存在しない絶対的な樂園だと、ずっと思っていた。

これから、ここは樂園だと、ずっと信じていた。

「これはもう、切断ですな」

無機質に、医者がい放った。

先日長く睨み合っていた隣国を討ち取る直前に、軍の将校の一人を庇って受けた俺の右腕の裂傷は思いの外深く、切断しないと命に関わると、淡々と医者は告げた。

しかし俺には遠くで誰かが呟いた戯れ言にしか聞こえなくて、遠くを見詰めながら医者がすぐ治る、と言うのを待っていた。

「手術の準備だ」

しかしいくら待っても医者から治る、という言葉は出てこず、遠くで響く戯れ言は続く。痛みをとくに通り越しいつそ麻痺をした右腕は、自分の物ではないようにだらしなく肩からぶら下がっている。

バタバタと慌ただしくなる白衣どもの向こうで、誇り高い軍服を着た者達が呟いた。

「認識番号 016 - 2857 高根^{たかね} 栄士^{えいじ}。軍人から軍奴に降格と伝令しておけ」

白衣どもよりも遠くにいる彼等の声だけが、放心した俺の頭に深く食い込んだ。

ちょっと待つて下さい。俺はまだ、戦えます。

その軍服に向かって叫んだ筈なのに、思い切り吸い込んだ空気は虚しく口から零れ落ちていった。いつそ叫びながらのたうち回り、暴れ狂えたらどれほど楽なのだろう。右腕の痛みと、先ほどの軍服達の会話の衝撃のせいで声すら出せない。

こうして俺は、右腕と共に、静かに全てを失った。

名前を呼ばれた気がして、ふと目を覚ました。白い天井とベッドを囲むカーテン。動かそうとして出来なかった右腕を見て絶句した。一つ、息をつきながら嘆く。目を開けたってどうしようもない。俺

はもう、この国では人ですらないのだ。

「高根君、」

やはり、呼ばれていた。動かない体の代わりに黒目だけをどうにか横にずらし、声の主を見る。そこにいたのはあの時俺が庇った、瀬野中将だった。肥えに肥えた私腹を現すような腹部が目に入り、その中心にナイフを突き立ててやりたくなる。どうして俺は、こんな奴を助けたのだろう。何故？俺は、軍人で、こいつは上官だから。上官だから、助けなくてはいけないのか？自分の人生を投げ出して？解らない、解らない。

思考が頭上を旋回して俺の判断力を奪う。麻酔がまだ効いている頭では、その思考すらもはや正常ではないのかもしれない。

す、と中将の手から渡されたのは一つの封筒。しかし俺が受け取れるような体ではないことを察したのか、中将はベッド横の床頭台の引き出しにそれを入れて、何も言わずに去っていった。勿論、お礼も謝罪もない。既に人から物となった俺に、そんな事言うのは不自然である、ということなのだろう。

叫びたかった。冗談じゃねえと奴を蹴りあげたかった。何故他人を守って怪我をして、こんな仕打ちを受けなければいけないのだ。

一瞬にしてこの国の絶対的なそれが、許せなくなった。憎しみが体内を埋め尽くす。しかし声はまだ出ない。代わり己の頬に伝ったのは、一辺の涙だった。

俺は知っているのだ。叫んだって暴れたって所詮俺は軍奴になって

しまったことを。今までどれだけ、作戦中に怪我をした者達を注意散漫だと見下げてきたかを。彼等の先を知りながらも見向きもしなかった自分を。

ただ俺だけが変わっただけなのだ。俺が、見下げられる立場になっただけだ。世界は何も、変わらない。この国の絶対は、俺一人では到底揺るがない。

漸く出た声は、非常に情けない、未練と絶望を吸い込んで発された嗚咽だけだった。

片腕と人生を勝手に捨てられて、俺は病院を出た。いつの間にか、今まで着ていた軍服は奪われていた。代わりに用意されていた粗末な服を身につける。いつもの通りに袖を通そうとするもうまくいかない。やっとの事で着替えを終えるとパサリと落ちている右袖に、またどうしようもなく叫び出したくなった。痛みは感じない。この感情は、そんなものをとうに凌駕している。

軍奴は軍の指揮下に入り、雑用の更に雑用のような仕事をしなくてはならない。給金は恐らく今までの5%にも満たないだろう。しかしそこにしか軍奴の生きる場所はない。軍奴は元軍人であるが故に国の機密事項を知り得ているから、他国へ好き勝手に行く事が出来ない。体を負傷している故、勝手に他の職に就く事もままならない。だから、皆居場所を求めて軍に縋る。飼い殺しとはこの事かと、恨みを通りに越し、笑った。

その時、一辺の記憶が呼び覚まされた。一瞬夢かとも思ったが、違う。瀬野中將が置いていった手紙。鞆を漁ると折れたまま入り込んでいた。何が書いてあるのかと中を開けると、中將の型に嵌まったような字で、とある住所が書き連ねてあった。その下には仕事をく

れてやる、と、ぞんざいな言葉も添えてあつた。一瞬体温が急上昇したかのような怒りが湧く。そのまま破り捨ててやろうかと思つたが、止めた。住所を見る限り、軍本部は愚か都心部からも酷く離れているようだ。

こんな田舎で何をしろというのだろうかと思つたが、軍本部で飼ひ慣らされるより余程マシかと考え直し、慣れぬ左手で手紙を折り畳むと、ほんの少しの荷物を持ち、楽園だつた都心部から気付かれぬまま、俺は背を向けた。

二、出逢

都心部から離れて、どれくらい経ったのかさえ解りかねる程、田舎に來た。あるのは心地よい嘘やネオンの眩しい明かりではなく吹き抜ける稲風。頬を厭に撫で付けてくるそれにやや嫌悪を抱きながら、着いた所は大きな西洋風の屋敷だった。大きな庭もあるが、手入れはあまりされていない様だ。片手でもたつきながら何とか手紙を取りだしもう一度住所を確認するが、間違いない。一体中将はここで俺に何をしろというのだろうか。ドアの呼び鈴を鳴らして応対を待った。

「はい」

聞こえた声はか細く、弱々しい。ギィ、と古い音を立てながら開いた扉の隙間から見えたのは、波打つ長い金系の髪を持つ少女と、木製の車椅子の車輪だった。

「軍の、瀬野中将にここで仕事をするよう命を受けてきたのですが、あまりの予想外さに呆氣に取られてしまったものの、何とか言葉を繋げた。すると少女は、ああ、と何か納得したような声を上げながら俺を見た。車椅子に座っているからか、首をぐいと上向きにして

俺を見る黒い瞳は、その宙を舞うような金髪とは何処か釣り合っていないかった。

「ようこそいらっしゃいました軍人様。どうぞ、お入りになって下さい」

年齢に似合わず丁寧な話し方で、少女は一段と大きく扉を開けた。その動作を助けるように扉を支え、中に入る。外の外観もさながら、中も立派な屋敷だった。

「こちらへどうぞ。軍人様」

にこやかに告げてくる少女を静止し、俺は彼女にもう自分が軍人ではない証拠の右腕を見せる。その意味をはっきりと理解したであろう少女は驚きに一瞬目を丸くするも、もう一度俺に軍人様、こちらですと告げた。

応接室のような部屋に通され、茶を用意すると部屋を出ていく彼女。軍奴を前にしてもまだ軍人様と呼んでくるこの不自然さ、瀬野中将の狙い。何もかもが不透明で、苛立ちが募るが暫くして膝にトレイを乗せた少女が戻ってきた。思わず膝からトレイを持ち上げると、ありがとうございますと微笑まれた。その笑顔は髪の色も相まって何処か異国の空気を醸し出す。その不自然さに、俺は密かに眉を寄

せたのだ。

それに気づいたか否か、少女はふわりと金髪を香らせ、たおやかに
お辞儀をした。

「改めて、ようこそいらつしやいました。自己紹介が遅れて申し訳
ありません。私、瀬野瞳子と申します」

どうぞよろしくお願い致します、と。まだ幼さの残る笑顔を向けて
くる彼女。あなた様は？と尋ねられたので、高根栄士です、と。名
前だけ告げた。

そうして、はたと気がつく。彼女の苗字。やはり聞き覚えがある。
この間まで敬い、つい最近は憎悪の象徴であつたその名前。

「お気づきかもしれませんが、私は瀬野の娘です。この度は父が、
大変世話になりました。ありがとうございました」

もう一度深々と礼をする少女を見た。肩から零れる金色の髪は生ま
れつきのようで、更に違和感。何故ならば、この国には金の髪を持
つ人などいない。

混血でなければ。

瞬間、俺が右腕を失ったあの先の戦いが何故か妙にハッキリと脳裏に蘇り、そこに今も鮮明に映る。あんな派手な外見で隠密行動は可能なのかと軍の者達と小馬鹿にした、敵国の兵士達の、あの鮮やかな金色。今俺の目の前の少女にも、彼等と同じ色が宿っていた。近隣諸国において、これ程鮮やかな金の髪は、あの国以外見当たらない。と、すれば、彼女は。

「高根様…！」

高く細い悲鳴が屋敷の天井に追突した。少女、瀬野瞳子の恐怖の入りに交じる声の元を辿ると、ナイフを構えた自分の左手が目に入った。慌ててナイフを放り投げ、膝を着いて無抵抗の所作をする。言葉より先に、まず体が動いた。じつとりと染み付いた軍人ならではの感覚が、どれ程にも俺を惨めにさせる。

「申し訳ありません…！申し訳、ありません…」

ただひたすら念仏を唱えるように謝罪を述べた。無抵抗の人間に刃を向けた自分など、もはや軍奴ですらない。敵と同じ色を見たからと言って狂気を振りかざすようでは、ただの獣だ。

「お察しの通りです。なので、顔をお上げ下さい」

凜とした、瀬野瞳子の声が、脳裏にこびりついた戦いの記憶を、一瞬にして消し去った。思わず顔を上げると、車椅子の上でまたもや丁寧に頭を下げる瀬野瞳子に、大分歳の離れているであろう少女に、俺は完全に気圧されてしまった。

「私は、瀬野中将と、敵国であつたあの国の女性との子です」

瞳の色はこちら、髪の色はあちらでしょう？と、少し髪を弄りながら首を傾げる彼女に、俺は先ほど感じた違和感の正体を見いだした。

「私の所に数日前、父より何年ぶりかも解らない手紙が届きました」

そこには、たった一行。

“ お前の事は、今度訪ねて来たものに全て任せろ。 ”

そう、書いてあつたと言う。

「それが、何を示すかは解りません。父が何を考えているかなど、皆目見当もつかない。けれど、」

此処に、高根様がいらした。それが答えなのかもしれません。

瀬野瞳子がふわりと笑った。その温かい笑顔に目が眩み、思わず目を細める。視界を狭めた中で彼女を見ながら、俺は瀬野中將からの手紙の内容を思い出していた。

“仕事をくれてやる”

この言葉が彼女の手紙同様、何を示しているのか、まるで不明だが、敢えて中將は俺を選んだのだという事は、理解できる。中將が俺に何をさせたいのか。それが解ればどうという訳ではない。だけど軍奴の俺には、軍人である奴に逆らえる筈がなかった。

「あの、高根様…」

思考の沼に浸かりきっていたようだ。瀬野瞳子がおずおずと俺を呼ぶ声がして、鈍い反射で顔を上げる。なんですか？、と。聞き返すと、彼女は興味深々、を表情にさらけ出しながら、

「高根様も、今日から此処へお住まいになる、という事ですね！」

ふわりと、また眩しい笑顔。つまりはそういう事なので、宜しくお願ひ致しますと、右手を出そうとして、一瞬沈黙。その後何事もなかったかを装って左手を出す。少しばかり頬を染めながら俺の手を両手で握る彼女の手は異国人のように白く、彼女は母親似なのだと言ひ心で呟いた。

差し出した両手の勢いで、ギィ、と。彼女の木製の車椅子が鳴いた。

三、対峙

軍人から、軍奴となって変わった事。

振り込まれる月給が、軍人の頃は一晚で使いきってしまう額であった事。

毎日耳にする剣の唸る音、銃が弾ける音は消えてなくなり、代わりに木製の車輪が軋む音が聞こえるようになった事。

高根少尉、と重低音で呼ばれる代わりに、

「ねえ、これからエージって呼んでもいいかしら？素敵な名前だもの！」

鈴が鳴るような声が、俺の鼓膜に向かって揺れるようになった。どこか異国人らしい訛りをした、金髪の少女の声。しかし忘れてはいけないと思うのは、手紙にあった瀬野中将の一文の仕事とは何か、ということだろう。まだその意味が理解出来ない俺は、無くした右腕の違和感を拭いされないまま、少しばかり立ち尽くした。

そんな俺と相反するように、目の前の金色の髪の少女は、とにかく

笑顔だった。俺の右腕に驚く事もなく、急に来た10程も歳の離れているであろう男に怖じ気づく事もなく、俺が何を目的に此处に来たかを知らないままでも、ただひたすらに嬉しそうに笑った。

「私ね、今までずっと一人で暮らしてきたの。たまにお手伝いさんが来てくれる事もあったけど、私を見ようともしてくれなかったんだから」

きつとこれのせいね、と敵国の血を主張する髪を弄りながら、少女、基い、瞳子様は言った。

出会った時とは正反対の口調で、はつらつと話す。どうやらあの時は来客時の対応のようだ。これがきつと、素の彼女だ。

「だからね、エージが来てくれて嬉しいのよ！」

とも言った。俺は黙ったまま頭を下げる事しか出来ない。俺は何故瞳子様の家にいる事になったのか、自分でも知らないからだ。とにかく俺は何か仕事をしなくてはいけない。そして、此处は何処なのかを知らなければならぬ。もしかしたら軍の一施設なのかもしれない。あの少女も、何かのカモフラージュかもしれない。そんな疑念が消えずに、溜まっては染み込んでいく。しかしそれらの答えは、一晩考えただけでは到底解らなかった。ただ一つ、出てきた答えといえ、あの少女を信用するな。これだけである。

そしてこの屋敷の一室を貰った次の日の朝、俺は昨日の俺の予想通

り、屋敷の片隅で再び所在なく立ち尽くした。そんな俺を知ってか知らずか、瞳子様は軋む木製の車輪を回しながら俺に近付いてくる。

「おはようエージ！よく眠れた？」

「…おはようございます、瞳子様。はい、おかげさまで」

嘘を、つく。勿論眠れるわけがない。何も解らない不透明な海底を泳いでいるようなものなのだから。しかしそんな事を10も年下の少女に言っても仕方がない。

すると瞳子様は漆黒の瞳を大きく開いた。

「本当？眠れなかったって、顔に書いてあるわよ」

せつかくゆつくり出来るのだから、もう少し寝ていたら？と言いなから片手で車椅子のアームレスト掴んで身乗り出し、もう片方の手で俺の左手を引っ張る瞳子様。その手をやんわりと振り払い、結構ですと、微笑む。元とはいえ軍人ともなれば感情を裏に隠すのは容易なことなのだ。

しかし彼女は、無言のままこちらを見ている。その透き通りそうな程黒い瞳に、思わず息を飲むも、油断してはいけない。彼女からは、ただ者ではない空気しかしてこないのだから。

「嘘をつくのはよくないわ。エージ」

軽やかな声が、じつとりと重い言葉を吐いた。彼女の持つ空気が、段々と張りつめてくる。

何故だ。こんなに年若い少女の雰囲気は、

気圧されている。

その時、自分が後退りした事に気が付く。頭の中は彼女のもつ気迫にも似た空気が俺の許容量を遥かに超え、今にもパンクしそうだ。この感覚は知っている。恐怖、だ。俺はこの少女の得体の知れない何かに、恐怖を感じている。

「エージ。私は本当の事を教えて欲しいだけよ。疲れているのでしよう?」

瞳子様は、もう一度俺に手を伸ばした。今度はその手に畏怖を感じ、思わず叫んでしまった。

「放って置いて下さい！どうせ部屋に居たって眠れませんから！」

言った瞬間、しまったと心根で呟く。先程の嘘を、認めてしまったのだ。それを聞いた瞳子様は、その瞳をさらに透き通らせた。

「あら、どうして？ここは軍の施設ではないわ。ゆっくりすればいいのよ」

そんな言葉、

「…信用など、出来ません。貴女は瀬野中将のご息女だ。ここが軍と直接関係がないとは、言い切れない。だから…」

「信用出来ないのね」

感情が溢れた事に恥じて、顔を俯かせた。俺は何をしている。相手は、10も年下の少女だ。

そう思えども、不安は波風のように際限なく俺を襲ってくる。右腕を無くした時に、俺は軍人としてのプライドをも無くしたというのか。

「申し訳ありません。しかし」

「そう思つのは当たり前だわエージ。でも、今は信じてとしか、言えないの。だって私も何も知らないんだもの。ただ、一つ言えるわ。私は、この国の軍が嫌いよ。」

「……だけどエージは優しい人。あの軍には勿体ない人物。それだけはよく解るわ」

まだ、知り合つて間もないけどね、と悪戯に笑う少女。その通りだ。俺達は、知り合つて間もない。

「知り合つて間もない人間を、何故そんなにも信用出来るのです。貴女は何も知らないだけだ。何も……」

もう大人としての、軍人としてのプライドなんてどこにもなかった。あるのは、不安、焦燥、疑念。それらがグルグルと、俺の周りでとぐるを巻くようにまわりついていた。

「…いいえ。エージは優しい人よ。私には、解るわ」

瞳子様が小さく、呟いた。その声の深さに思わず顔を上げると、瞳子様は車椅子から立ち上がろうとし、そのまま倒れ込みそうになった。小さな悲鳴と共にグラリと、彼女の視界が揺れる。

「瞳子様！」

考えるより先に、体が動いた。慌てて手を伸ばし、なんとか瞳子様の体を支えた。ギクリとする程、彼女の体は軽い。

「…ほら、優しいわ。エージは」

俺の手によってもう一度車椅子に座った瞳子様が、信じていたものと笑った。その姿に俺は絶句する。何故、

「何故、貴女は俺を信じられるのですか…」

彼女からしても、きっと俺は得体の知れない人物だというのに。
瞳子様は、笑った。優しいけど、何処か強い微笑みで。

「エージがそうさせているのよ」

だから、少し寝てね。と言うなり瞳子様は俺に背を向けて車椅子を押した。

彼女が扉を閉めた途端、どっと力が抜け、思わずその場に座り込む。

人を信用する事への恐怖を、何故この歳になって痛感しているのだろう。

その答えは、以外にも直ぐ出た。

軍人としての俺は、人を信用する事などすっかり忘れていたのだった。そう思った瞬間、再びえもいえぬ恐怖が押し寄せた。他者を信用する事を忘れるなど、なんと空しくおぞましい事だろうか。

先ずは、彼女を、瞳子様をよく見てみよう。信用する事はまだ困難である臆病者の俺には、そこからが最良の道なのかもしれない。

四、朝食

「おはよう、エージ！」

「おはようございます、瞳子様」

昨日とは同じなようで少し違う挨拶を、昨日と変わらない挨拶をする瞳子様へと返した。

そう、少し違う。今日は彼女を知ろうという昨日には居なかった俺が、昨日のようにダイニングの隅に立っていた。

そうして俺が挨拶をしてから思考に耽っている隙に、既に二人分の朝食は瞳子様の手によって作られ始めていた。車椅子でも調理が出来るよう作られた為低いキッチン。俺が背を丸めて作業している姿を思い浮かべると、にわかに頭痛がする。しかしただ何もせずダイニングに立ち尽くすだけでは、障害物と変わらない。キッチンへと入っていき、瞳子様に申し訳ありません、手伝いますというのと、瞳子様は昨日のように、やはり笑った。

笑って、料理は私の役割だと胸を張る。そこで俺は何度目か解らぬ現実を見る。利き手を失ったばかりの俺が、人並みに料理が出来るわけがない。それを己より早く察して下さったのか、瞳子様は私料理好きなのよ、と明るげに告げてきた。ただ一つ、礼を言う代わりに頭を下げた。

そして俺が礼をしたそこで、彼女は眉間に皺を寄せた。

「エージはどうして、私を様付けで呼ぶの？敬語もやめてちょうだい」

私の方がうんと年下なのに、変だわ。

せめて食器だけでも出そうと棚に手を伸ばし、左手で重ねた皿がチヤリと鳴った。その上に置いていたフォークは音もなく滑り落ちる。

「貴女は瀬野中将のご息女であり、俺は軍奴です」

それ以外、なんの理由がありません。と、自分でも少し驚く位冷たい声音が漏れた。

右腕が痛む。そんなことあるはずもないことは解っているのに、ビリビリと痺れのようなものを俺は確かに感じていた。

「そんなもの、どうだっていいわ」

驚く程軽い口調で、彼女は言った。

「軍人が怪我をただけで最下層の身分になつてしまつたとか、誰が誰より偉いとか。そんなもの、外側での常識でしょう？ 此処では必要ないわ。私達の世界は、こんなに狭いのよ」

ほら、この屋敷の中だけで、私達だけだもの。この世界はね。

そう言い切る瞳子様に、どうしてもか、俺の肌は粟立つていた。まただ。また俺は、瞳子様の何かを怖れた。そしてその理由は、またわからない。

「だからね、エージ。貴方は軍奴なんてものではないし、私が誰の娘であろうと関係ないの。だから敬語もなしよ。私の事は呼び捨てね」

ね、お願いよ。と、両手を会わせてくるが、俺は頑として首を縦に振らなかつた。否、振れなかつた。少女のねだり一つで覆る程、軍奴となつた俺の受けた無数の傷は癒えない。癒えるはずもない。妙に長い無言の空間の中で何かを感じ取つたのか瞳子様は、じゃあその内ね。とため息混じりに笑つた。俺は勿論、返事をしなかつた。

彼女は、俺を軍奴としてではなく、対等に見て下さっているのだろう。しかし俺はそれをまだ受け入れられない。それは俺が脆弱なせいもあるし、この国の教育のせいもあると思う。しかし、これで漸く出会つた時の違和感は払拭することができたのだ。

初めて出会った時、彼女が俺を軍人様、などと言うから俺は彼女に自分が軍人ではない証拠の、空っぽの右腕を見せた。それでも彼女はもう一度俺を軍人様と呼んだ。その時は計り知れない違和感と、屈辱感しかえられなかったのだが、彼女にとっては軍人だろうが軍奴だろうが関係なかったのだ。何故なら彼女の世界はこの屋敷の中だけのだから。

それは幸福な事であり、哀しい事でもあるだろう。しかし彼女は笑う。この短い間でも目立つ程、よく笑うのだ。

「エージ、ほら皿を取ってちょうだい」

早く早くとフライパンを片手に急かす瞳子様に一つ返事をする、俺は皿を一枚、そのフライパンの近くに寄せた。ツルンと皿に滑り落ちたのは形の良いオムレツで。思わず美味しそうですね、と呟いた俺に、彼女はまた満面の笑みをぶつけてきたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0048w/>

匣庭エデン

2011年11月12日08時58分発行